

〔研究ノート〕

アカデミックリテラシー授業報告2016

The Report on “Academic Literacy” 2016

中村学園大学 流通科学部

福 沢 健・音 成 陽 子・木 下 和 也・池 田 祐 子
新 茂 則・手 嶋 恵 美・中 川 隆・中 川 宏 道

1. はじめに

中村学園大学では、平成26年度のカリキュラムの改訂に伴い、「アカデミックリテラシー」という科目を新設した。「アカデミックリテラシー」は1年前期に必修科目として置くもので、流通科学部に入学した新1年生を対象とする初年次教育科目として、大きな役割が期待されている。その教育目標は次の通りである。

- ①高校生活から大学生活へ順調に移行するための心構えを知り、新しい仲間との親睦を図る。
- ②高校時代の受動的な学習ではなく、大学では興味を持った分野を自ら追求する能動的な学習が必要なことを実体験し、それに必要なスキルを身につける。
- ③流通科学部のカリキュラムに対する理解を深め、そのために今何をやるべきかを考える。

従来、中村学園大学流通科学部においては、初年次教育科目として「入門演習」があった。しかし、「入門演習」は、担当者が流動的であったということもあり、プログラムの内容がなかなか固定化しないという問題点があった。これに対して、「アカデミックリテラシー」では担当者がある程度固定化し、継続的に取り組んでいく体制とした。本稿は、新体制における二年目の初めての取り組みを記録・報告を、次年度以降の中村学園大学流通科学部の初年次教育の向上のための参考として残しておくことを目的

とするものである。

2. 授業概要及び授業計画

まず、「アカデミックリテラシー」の授業概要及び、授業計画（15回）を示す。

授業は、①小教室での各指導主任による教室単位の講義及び演習と、②大教室での講師による全体講義及び③授業時間外の図書館ツアーからなる。①は、各クラス単位での指導主任による自由な講習を行うが、数名のグループ単位でテーマを決め、自ら調査し、互いに報告しあい、意見を交換し、レポートにまとめるというグループ学習と、講義をノートにまとめ、新聞や書籍等から補足情報を収集する各人の個人学習を通じて、大学でのスタディ・スキルを習得する。②は、履修や TOEIC 試験、海外研修についての講義を行う。③は、1 回だけ別途時間を指定し、30名単位での図書館ツアーを行い、図書館の利用方法を学ぶというものである。

各回の授業計画は、以下の通りである。

- 第1回 履修指導 ①（大教室）コース制・ガイドブックの説明 ②（小教室）各指導主任による相談 ③入学前教育（英語、SPI）の回収
- 第2回（小教室）プレイスメントテストの実施
- 第3回図書館ツアー（担当：図書館）8回に分けて行うため、実施時期はクラスにより異なる

る。

●第4回～第13回（小教室）テーマ授業（1）～（8） ①各指導主任がテーマを決め、クラスごとに講義を行う。②テーマに基づいた課題を行い、レポートを作成する。

●第9回（小教室）適正検査の実施

●第11回（大教室）①TOEIC 試験の説明と海外研修の紹介。②海外スカラシップ制度の紹介。

●第14回（小教室）グループ学習 各指導主任が定めたテーマに基づき、調査・発表・レポート作成を行う。

●第15回（大教室）今後の履修に向けてコース選択希望調査を行う。

まず、全体のプログラムとしては、第1回の履修指導、第2回のプレースメントテスト、第3回の図書館ツアー、第9回の適正検査の実施、第11回の海外スカラシップ制度の紹介、第15回のコース選択の説明及び希望調査がある。まず、プレースメントテストについて述べる。プレースメントテストは、高校までの基礎的学力を問う試験で、英・数・国で実施した。この点数の低かった学生については、昨年度と同様、基礎教育センターにおいて、補講を受けることを義務づけた。プレースメントテストの成績と一学年における成績、補講の実施の効果、などについては、別途に報告する。

平成28年度に新たに適正検査の実施を行った。キャリア教育の一環として1年生全員が受験する機会を設けたものである。

その他「アカデミックリテラシー」の特色として挙げられるのは、第5回～第13回に実施したテーマ授業（1）～（8）である。各指導主任は、1時間ずつ順番にローテーションを組んで、それぞれテーマの授業を各クラスで順番に行っていく。そして、そこでテーマに基づいた課題を行い、そのレポートの作成を学生に課す。したがって、各教員は、テーマ授業を各クラスに

対して八回繰り返すことになる。また、第3回のところで予定している図書館ツアーに関しては、全学年が一度に行うことができないので、テーマ授業と共に各クラスで順番に行っていく。さらに、各教員が指導主任を担当するクラスに対しては、ローテーションで行ったテーマ授業の他に、第14回に独自のグループ学習を行った。この内容は各教員に任せた。テーマ授業・図書館ツアー・グループ授業のローテーション表は次頁に示した。

また、評価方法は、①テーマ授業に関するレポートの内容、②グループ学習報告と最終レポートの内容、③出席状況及び積極性等を総合的に勘案することとした。テーマ授業の内容を各10点として、各教員に採点してもらい（計70点）、クラス単位のグループ学習の点数を30点として、それに加えた。そこに、出席状況及び積極性等によって加点・減点を加えた。特に、プレースメント試験において、低得点だった学生に対しては、基礎教育センターにおける補講を必修として、その出欠を点数に反映させた。

【テーマ授業の例】

●福沢健 吉見俊哉「ディズニーランド」を読む

大学の勉強の意味と、必要な技能（読解力・要約力・思考力）とを考えてもらうために、「ディズニーランド」を例にとりてワークショップを行った。

東京ディズニーランドの地図、北九州スペースワールドの地図を配布して、両者の違いをグループごとに討論して、発表させた。

次に、吉見俊哉「ディズニーランド」を読ませて内容を要約させ、そこで、自分たちが漠然と考えていたディズニーランドの特徴は、「インターラクティブ性」「三次元のアニメーション」という明確なコンセプトに基づいて作られたものであることを認識させた。ここで、大学の勉強とは、理解できないような難しい理論を

			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	
			4/6	4/13	4/20	4/27	5/11	5/18	5/25	6/1	6/8	6/15	6/22	6/29	7/6	7/13	7/20	
クラス	指導主任	教室	合同	合同	テーマ授業・グループ演習・図書館ツアー (クラス)										合同	グループ 演習 (クラス)		合同
1a	A		ガイダンス (大教室)	プレースメントテスト (各クラスの教室)	A	A (図)	C	D	E	F	G	H	B	スカラシップなど (大教室)	A	A	コース 選択など (大教室)	
1b	B	B			D (図)	E	F	G	H	A	C	B	B					
2a	C	C			E	F	C (図)	G	H	A	B	D	C		C			
2b	D	D			D	F	G	H	D (図)	A	B	C	E		D	D		
3a	E	E			E	G	H	A	B	E (図)	C	D	F		E	E		
3b	F	F			F	H	A	B	C	D	F (図)	E	G		F	F		
4a	G	G			G	B	D	F	H	C	E	G (図)	A		G	G		
4b	H	H			H	C	E	G	A	B	D	F	H (図)		H	H		

覚えるものではなく、自分たちが漠然と感じていたもの、感覚的に捉えているものについて、論理的に説明するものであることを強調した。また、ディズニーランドの特徴については、他の立場からもさまざまに説明されていることを述べたうえで、大学の勉強とは一つの結論を覚えるものではないということも述べた。

レポートは、吉見の論文を踏まえて、ディズニーランドと他のテーマパークとの違いをまとめさせた。

●音成陽子 日常生活の中の健康チェック

生涯スポーツ論や健康・スポーツ科学実習、生涯スポーツ実習と関連して、だれもが日常生活の中でできる健康チェックや体力チェックをテーマに実施した。課題として個々の学生が普段行っている健康チェックについて記述させ、

再認識を行った。

1. 脈拍数をはかろう
 - 1) 脈拍数 (自分、友達)
 - 2) 脈拍からわかる健康状態
 - (1) 脈拍のはかり方
 - (2) 不整脈 (期外収縮) とは
 - ・頻脈、徐脈、その他の症状
 - 3) 脈拍計を使って (階段、速歩などの脈拍の変化)
2. 簡単な体力チェックをしみよう
 - 1) (40センチの台を使って) 立ち上がりテスト
 - 2) 立ち上がりテストからわかる体力
3. このモデルは何か
 - ・見た目、色、触感、重さ
4. その他、日常生活でできる健康チェックを考える (課題)

●木下和也 ビジネスと予測手法

前年度と同じく「ビジネスと予測手法」という題材で、過去のデータから将来の需要を予測することができることをテーマに授業を進めた。

ただし、内容は数学的なものではなく、他人に納得してもらおう計算過程の説明をどのように記述すべきかを中心に進めた。いわば、「計算問題」であっても、試験やレポートでは読む側の立場を考えて、「正しい日本語で、相手が納得できるように」記述しなければならないことを説明した。

数学が苦手であることは予想していたとおりであるが、数字を扱うことが、ビジネスや将来の仕事に関係あると考えている学生は少ないように感じた。しかし前年度と異なり、内容について興味を持って質問したり、感想を言いに来たりする学生が少なからずいた点は注目に値する。

ただし、学ぶ目的を説明して模範解答を示したにもかかわらず、きれいに計算過程を説明しながら書く習慣ができていないという点は、前年度の1年生と同じであった。基礎学力同様に、答案の記述方法やレポートの書き方についても指導を受ける必要がある学生は、毎年多く存在し、この点に留意して1年生への指導を行わなければならないと感じている。

そのほか、全般的に気づいた点はプレースメントテストのスコア（偏差値）は学習態度や意欲、そのほかの科目の成績にある程度相関があるということであり、この点は前年度と同様である。またクラスによりプレースメントテストの成績が偏って分布しており、クラス間には学力の格差がある。後期の必修科目で筆者が感じたことは、学力のクラス間格差はその後もクラスの雰囲気などに少なからず影響しているということであり、今後入学時のクラス編成において何らかの対処が必要であると感じている。

●池田祐子 英語によるコミュニケーション能

力を評価する

「TOEIC Listening and Reading Test」への導入を図った。前年度まで、流通科学部では1、2年生全員に単位取得要件としてTOEIC IPテストを受験させていたが、今年度より完全任意受験とした。よって、ビジネス英語であるTOEIC受験の意義や、先輩たちの体験談を踏まえた就職活動におけるTOEICの有効性を説き、学内TOEIC IPテスト受験への動機付けとなることを目的とした。

授業では問題の構成と解答の戦略について解説しながら、Part 1からPart 7まで一通り問題を解かせた。この5月からTOEICは新出題形式となり一部変更され、ネイティブの口語表現が加わり、より複雑な問題を含むようになった。テストを受けるにあたって予め心得おくべき情報も授業では告知した。

1年生は大学に入学したばかりで、ビジネス英語には馴染みが薄いと思われる。しかし、ビジネスパーソンを目指す流通学部に入學したからには、将来的に仕事で英語を使用する可能性も視野に入れ、積極的に英語学習に臨む姿勢が期待される。学生は実践的な英語を身につけることを目標としつつ、英語の理解度を数値化するTOEICのスコアアップも目指すことが望ましい。しかし7月のTOEIC IPテストにおいて、1年生の任意受験者は想像していたよりも少ない結果となった。一方で、単位取得要件として一年次にTOEIC IPテストを受験していた2年生は、任意受験者が非常に多かった。この結果を踏まえて、次年度のTOEIC IPテストの実施方法について、再考の必要性があると感じている。

●新 茂則 人生のライフサイクルから考えるキャリア教育

人生のライフサイクルから職業の意味と理解を図り「望ましい職業観と勤労観の育成」を視座しキャリア教育の授業を行った。学生が「社

会において果たさなければならない使命の自覚に基き、将来の進路を考えること」を授業目標とした。人生の理想的な「自己実現 (self-actualization)」達成に向け、大学生活で「生き方」、「生きる力」「自立して生活する力」について理解を図る。具体的には下記のとおりである。

- ①職業の意義について理解し自己概念と自己意識について考える。
- ②人間は職業生活を通して社会生活を営むことを自覚する。
- ③将来の夢や願いを実現に向けた努力の必要性を自覚する。
- ④進路選択を「生きる力」の観点から吟味する。
- ⑤自分の生き方を求め、進路を自分で探索する。

配布資料は拙著「人生のライフサイクルから考えるキャリア教育と資格取得」及び「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」「社会人基礎力」(経済産業省)を使用した。

●手嶋恵美 商品開発の基本

本講義では、はじめに企業における商品開発の重要性について説明し、続いて学生たちにとって身近な商品である「文房具」を例に商品開発の基本となる商品観察の視点とアイデアの発想法について紹介を行った。その後、4名程度のグループに分かれブレインストーミングの手法を用いて既存の「ペンケース」に対する課題の抽出と新商品・改善のアイデア発想のワークを体験させた。受講した学生たちからは「今までとは違う視点で商品を見ることができた」「これから買い物に行く時には、消費者としての視点だけでなく、生産者としての視点でも商品を見てみたい」といった感想が聞かれた。

この講義をきっかけに、企業の商品戦略・マーケティング戦略に少しでも関心を持ってくれればと願っている。

●中川 隆 大学生活で達成したいこと

まず、大学で何を学びたいのか、何を行いたいのか、何を達成したいのか、などについて考えてもらうべく、大学の現状・意義・役割などについて語った。さらに、学生達の多くが達成したいと考える語学の習得も資格の取得も反復と継続という要素を抜きにしては達成できないものである。本授業では、学習への能動的姿勢を引き出し、充実した学生生活を送るための動機付けを与えるよう、「自制心」や「やり抜く力」の重要性について強調した。

●中川宏道 消費者心理学 なぜ思わず買ってしまうのか？

メーカーや小売業者の、消費者心理学に裏打ちされたさまざまな仕掛けが存在する。本授業では、その仕掛けのうちいくつかの事例と、その背後にあるメカニズム(理論)を紹介しながら、皆さんが上手なショッピングをするためにはどのように対処すべきかを消費者の立場から考えていくことを目的とする。

具体的には、心理的財布理論(消費者は心理的に複数の財布を持っており、ある支出をおこなう場合、どの心理的財布から支出するかで金銭的支出による心の痛みが異なるという理論)や、フレーミング効果(表現の仕方を変えることによって、基準が変化するため、同じことなのに感じ方や選択や行動まで変わること)などの理論について、具体的な例をあげながら参加型の講義をおこなった。

3. 考察

アカデミックリテラシーは、各指導主任によるテーマ授業を行う点に特色がある。テーマ授業の共通の趣旨は、高等学校と大学との接続、特に学ぶための姿勢の違いについて、学生自身に考えてもらおうというものであった。学生には、さまざまな授業を通して、大学生活におい

て必要なアカデミックリテラシーとは何かを考えていてもらいたいということが、我々アカデミックリテラシー担当の教員の願いである。

最後に、2015年の問題点について、2016年度はどのように改善したか。またその効果はどうであったかという点について述べる。

①2015年にも記したが、この授業の最大の目的は指導主任と学生とのつながりを形成することにある。2015年からは、テーマ授業の1番初めに指導主任の授業を置き、指導主任との関係をまず深めるようにしたのは、学生は指導主任が誰かを明確に把握したので効果的であった。

②2016年の問題点としては効果測定を行っていなかったという点があった。2016年は、基礎教育センターの方での効果測定は行ったが、アカデミックリテラシーという授業を通して、学生にどのような意識の変化があったか、またはなかったかをきちんと検証できていない。効果測定システムを、特に社会人基礎力との関係から、考えていかなければならない。次年度以降の課題としたい。

③近年に共通する問題として、学生の基礎学力の格差が大きいということが挙げられる。プレースメントテストの導入によって、学生の基礎学力がどの程度かは明らかになった。その結果、プレースメントテストの点数と、学生の理解力・学習態度・意欲・成績との間には、ある程度の相関があることが分かった。ただし、プレースメントテストの点数が低かった学生は、単に基礎学力が不足している場合もあるが、学生相談室のカounselingの必要なケースも存在した。基礎教育センター・学生相談室との連携をさらに深めていく必要があるだろう。

④学部としてアクティブラーニングに取り組んでいることが反映され、各テーマ授業においても、アクティブラーニングの手法を意識している授業が多かった。アクティブラーニングは学生の活性化に有効なので、アカデミックリテラシーにおいても積極的に取り入れていきたい。

以上、2016年のアカデミックリテラシーの概要とその問題点である。報告として記録に残すことによって、次年度以降に役立てていきたい。